



日本製紙工場前の『オバQ公園』

植物標本整理中に出てきた『釧路市鳥取 オバQ公園』と書かれた標本ラベル。見た瞬間、子どもの頃夕方に観ていたテレビアニメのテーマソングが脳内で再生されました。

その時整理していたのは平成元年前後の植物標本で、新釧路川右岸側の鳥取から昭和にかけて、河川敷や住宅地、当時は残っていた湿地などで採集されたものです。現在この地域では見られなさそうな湿地の植物から外来植物まで、さまざまな種類が含まれていて、それらのうち『オバQ公園』で採られたものはイネ科植物2点でした。

とりあえず検索、とググってみたものの、ネット上には手がかりなし。地図を見ると釧路市鳥取地区には『鳥取〇号公園』がいくつかあるので、この中のどれかだろうと思われました。博

物館の資料にも情報はなさそうです。手がかりを探しつつオバQ公園と呼ばれる理由を考えてみました。オバQの形の遊具があった、壁などにオバQの絵が描かれていた、1970年代に大流行したという『オバQ音頭』を盆踊り大会で踊った、あるいは本物(?)のオバQが出るという噂があった……。

推測の域を出ないので、近郊で全戸配布されるフリーペーパーWeekly fit (北海道新聞社発行)の連載『博物館学芸員のとおき話』に植物標本ラベルの少し古い地名に関するコラムを書き、オバQ公園の情報を募ってみました。すると、発行日にさっそく2件電話をいただきました。1件は外に出ていたため伝言を受け取り、もう1件は直接お話を伺うことができました。

曰く「オバQ公園は日本製紙釧路工場の正門近くにある鳥取5号公園」、「当時の十條製紙の社宅の人たちがそう呼んでいた」、しかし「オバQの遊具はなかった」とのこと。

また、コラムをきっかけに、知り合いの方が子どもの頃この界隈にときどき遊びに行っていたということを知りました。そこでオバQ音頭起源説を話

してみたところ「盆踊りは十條サービスセンターの駐車場で開かれていた」とのことで、あえなく却下。鳥取5号公園は十條サービスセンターと道路を挟んだ向かいにあるので、そりゃそうだよな、と思いました。その方はオバQ公園という名前は知らなかったそうです。

オバQの痕跡を求め、鳥取5号公園へ行ってみました。入り口の銘板は『鳥取記念公園』。そこは旧鳥取町の役場があった場所で、合併記念碑も建てていました。公園内にオバQを想起させるものは見当たりませんでした。

標本を採集した方は当時、十條製紙の社宅に住んでいたそうなので、電話で伺った「社宅の人たちがオバQ公園と呼んでいた」という証言と一致し、かなりローカルな呼称だったようです。

2021年に日本製紙釧路工場での紙の生産が終了し、100年にわたる製紙業に関する資料やまちの記録・記憶を博物館でも収集し始めています。その中で『オバQ公園』の謎が解き明かされることを期待しています。

(加藤ゆき恵)

趣味のお話

私はわりと多趣味です。ただ、若干好みに偏りはあるかもしれませんが。初めてしたためたチャランケチャシ (No.420) にも書きましたが、子どもの時から海外や異文化に関心を持っていました。いつか留学したいという夢が実現したのはもう30歳も目前という頃、半年強ほどオーストラリアのメルボルンで学ぶ機会を与えられました。この比較的短い海外生活を機に変化したことはいくつかありました。その中でも大きなこととして、自分のアイデンティティというか、文化の拠り所をそれまでよりも明確に自覚したということがあったように思います。

留学後のある日、アルバイト帰りの電車のホームで突然啓示を受けました。啓示というと大袈裟ですが、三味線を

始めなくては、と感じたのです。そして可及的速やかに長唄三味線を習い始めました。しかし思えば、三味線への憧れは大学時代に受講した日本近世史の講義に端を発していました。その講義担当の先生は近世の芸能がご専門でしたので、歌舞伎の歴史的成立背景や、舞台装置の仕組み、演目の詳しい解説など、大変興味深い内容で、文案や歌舞伎の舞台を見に行く機会もありました。歌舞伎の演目を初めて鑑賞した際に、役者さんたちの容姿の華麗さや話の面白さと共に、趣きを添えている長唄三味線の音色に強く惹かれたことを思い出します。その経験があつての啓示だったと思います。

こうして長唄三味線はいつとき自分の趣味の筆頭に加わったわけですが、今は休止中です。でも、そこから派生した別の趣味があります。三味線の発表会などでは和服を着用しますが、当

時自分では着付けができませんでした。実家にいくらかあった母の着物を有効活用したいという思いもあり、また自らの文化的ルーツの確認という意味でも、普段から和服で生活できれば、とと思って着付けを習い、出来るだけ和服で過ごすようにしてみました。しかし、和服というのは手入れにも、着脱にも時間と労力がかかりますし、何よりさまざまな身体の動きに制限が加わります。よくもまあ昔の日本人たちはこれで毎日生活していたものだな、と感ずけてしまいます。したがって、心と時間に余裕がある時または取返して余裕を感じたい時にしか実践できませんが、現在も趣味と言える程度に着付けや、布地を愛でること(これは仕事にも役立ちます)を楽しんでいるのでした。

(城石 梨奈)